巻頭言

大学の秋

藤本 穣彦（明治大学准教授／協同総研常任理事）

共に学ぶとはどういうことか。一人ひとり、個別の課題をもってバラバラに生きているはずなのに、一人ではたどり着けない思考の世界がある。テーマに集い、テキストを囲んで対話し、共に旅をし、饗宴を重ねる。仲間の調査に付き合い、付き合わせ、経験を言葉にするためうんぬん言いながら、論文を書く。丁寧に査読し合い、共に育てていく。その中で、ある時、パッと拓かれる視野がある。確かな手ごたえをもった思考が生まれる。身体の深くに定着し、自身の行動に働きかけられてくる。自分の思考なのに、自分だけの思考ではないような。自分の身体なのに、自分だけの身体ではないような。この感覚は、なに？

大学の秋はさっと過ぎ去り、気が付けば冬が訪れている。卒業研究を一人ひとり点検し、新しい学生を迎え入れる準備が進む。わたしは2020年４月から、明治大学政治経済学部に赴任した。食料経済学研究室を引き継ぎ、藤本ゼミを主宰している。「食べることが好きな人」というのがゼミの入室要件。「食と○○」の「○○」に自分の課題を立て、自由に探究する。「10年後のわたし」をバックキャストする。じっくりと時間をかけて自分を育ててね、と伝え続ける。

ゼミは面白い。明治政経では、1,150名の新入生を受け入れており、２年生の秋に、翌年ゼミをもつ90名程度の教員にこれを分属する「ゼミ試」がある。ゼミ試では、調整や忖度はなく、学生が希望先を選択し、教員は指名されることではじめて、どのような学生が志望しているかを知る。藤本ゼミは、今年、５期生を募集した。

わたしは、１、２年生の和泉キャンパスの講義をもっておらず、基本的に知られていない。ゼミの３年生が中心となって「ゼミ試広報」を行う。秋学期の始まる９月末ころ、公式SNSが動きはじめ、ゼミの雰囲気やキャラクター、学習内容が紹介される。うちは、試験も３年生が実施する。課題は、「将来に手渡したいレシピ」を写真やイラストで表現して、というもの。座談会やオープンゼミナールを開催して解題する。食料経済学とはなにか。暮らしをフィールドワークするとはどういうことか。対話、現場、仲間。藤本ゼミの協同学習の哲学を、自分たちなりの仕方で伝える。

SNSに送られてくるダイレクト・メッセージに応答し、キャリアデザインについて４年生や大学院生を交えて相談にのる。もちろん、藤本ゼミを希望してほし

いけれど、それ以上に、ゼミに入り、仲間と共にひとつのテーマを探究することの面白さを伝えているようだ。

こうしたプロセスの全体がゼミメンバーの内で共有されながら進む。言葉が重なり、意味の流れが生まれていく。それはまた、ゼミのアイデンティティを確認し、自分たちの内に深く染み込ませていく時間でもある。

30名をこえる学生が希望してくれ、選考プロセスに入った。エントリー・シートを点検しながら、課題を採点する。面接で問いかける論点を確認する。面接順と担当者を決めていく。……こう書くとさらっとしているが、かなり重たい作業で、これだけでまるまる２日間、本気で対話した。面接で一人ひとりの個性を取り逃さないよう。希望者には、自分を出し切ったと思ってもらえるよう。

選考当日は、研究関心と価値観を聴く面接グループのふたつを編成した。４年生や大学院生も差し入れをもってきてくれ、ドアマンやお菓子コーナーに座って、受験生を和ませる。こうして受験生は、ドアマン、第１面接、お菓子コーナー、第２面接の４ヶ所で現役学生に接し、１時間ほど試験会場に滞留する。面接以外にも、就職活動や大学院での研究、部活との両立など色んな話をしている。かなり多角的な視点から観る／観られる時間となる。こうして10時間ほどかけて全員を面接し終えた。

翌日、オンラインで集まって最終選考会。３年生が次期ゼミの骨格となる10名を選出する。その様子を静かに見守る。はじめはバラバラで、まとまりそうもないのだけれど、対話を続けていくうちに、ある時、パッとまとまる瞬間がある。その時が訪れるのを待ち、見届ける。推薦を受けたメンバーをそのままアクセプトする。４年生、大学院生の評価を聴いて、２名を追加。自分の推薦を１名だけもぐり込ませて13名で決着した。藤本ゼミへようこそ。仲間と共に、よい学びをして、「よく生きる」ための羅針盤を手に入れてくださいね。

どれだけの時間がかかっただろう。どうして毎年これをくり返すのだろう。わたしがわたしの基準で選べばよいのかもしれないけれど、それは面白くないんだよなあ。たとえ同じ結論に至るとしても、学生たちと共に時間をかけて、なじむ仕方でじんわりと決まるのがよい。共に学ぶ仲間、探究の共同体を、その手で創り上げるという協同の経験が、言葉を尽くして、具体的な手ごたえをもって、「ここ」に蓄積されていく。どんなコミュニティが育つかな。永く長く、続けていく楽しみがある。